

佐賀支店
料金別納郵便
低平地
研究会



ニューズレター

低平地研究会 (LORA), 国際低平地研究協会 (IALT)

<https://lora-saga.jp/>

<https://lora-saga.jp/ialt/>

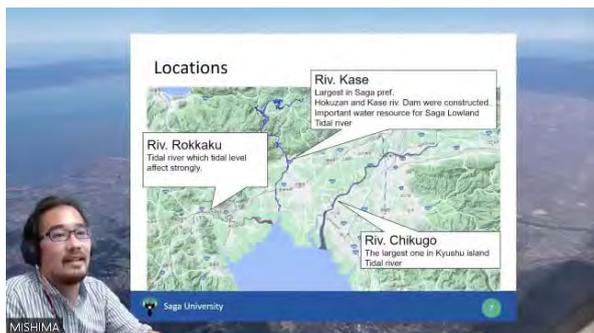
☎840-8502 佐賀市本庄町1 佐賀大学理工学部内 TEL/FAX : 0952-28-8712

令和5(2023)年03月12日

環境専門部会

低平地に関する ASIAN 協働セミナーの開催

令和4年11月28日(月)~12月8日(火)にオンライン形式にて開催しました。参加大学はインドネシアのハサヌディン大学とランブンマンクラット大学、ベトナムのカントー大学、そして佐賀大学の4大学で、学生が39名の学生と、講師として各大学から教員7名も参加しました。研究会からも1名の会員にご参加いただきました。本プログラムは教員らによる低平地に関する特別講義、現場紹介動画、ポスターセッションで構成されており、多くの意見が積極的に交換される場となっていました。



Zoom のキャプション



会場の Facebook ページ

都市空間専門部会

第23回コミュニティデザインカフェ 「幸せを共有する営みとしての建築／ 環境としての建築と都市」

令和5年2月27日(月) 13:30~18:00 に佐賀大学理工学部4号館デザインスタジオにおいて、主催の佐賀大学理工学部建築環境デザインコースと同学部コミュニティデザイン研究会、共催の(一社)日本建築学会九州支部佐賀支所とともに開催しました。

末廣香織氏(九州大学教授)・金子尚志氏(滋賀県立大学准教授)をお招きし、特別講演会及び3年生建築設計課題「new normal UNIVERSITY LIBRARY」に意匠+環境の両側面から取り組んだ作品・卒業制作・修士制作の優秀作品を一堂に会したゲスト講評会・バーティカルレビューを開催しました。ご講演ののち、3年生4グループ、卒業制作3名、修士制作2名が作品発表しました。現役学生30名のほか学外者など計45名の参加者数でした。他学年の作品を同時に講評するバーティカルレビューは2回目の試みでしたが、大変有意義な機会となりました。



低平地研究に関する豆知識 -その 36-

佐賀の空襲と有明海

有明海は約 6 メートルという日本一の干満差があり、神話の「海彦山彦」に出てくる「(潮) 干珠・(潮) 満珠」のもとになったという説もある。この壮大かつ不思議な自然現象が佐賀の空襲において予想外の結果を生じさせたという話を佐賀経済調査協会の宮崎善吾(故人)さんに昔、伺ったことがある。

宮崎さんによると、「米軍はまず、昼間に爆撃対象地域を調査し、海岸線から何キロに佐賀市内があるかを測量して帰る。しかし、空襲の時間は夜中でしかも当時有明海は引き潮だった。引き潮により海岸線が大きく南に下がっていたため、諸富、北川副、大崎地区の被害が大きくなってしまった。」とのことであった。

佐賀空襲については住喜重著『中小都市空襲』によると「米軍の第 58 航空団麾下の 2 軍団 68 機が 1945 年 8 月 5 日の午後 11 時 41 分から 6 日午前 0 時 43 分までの 1 時間に、459 トンの高性能爆弾、焼夷弾を投下したが、闇に隠れた佐賀は燃えず佐賀の消失面積 0 であった。レーダー・スコープ上の佐賀市の映像は弱く、灯火管制も万全であったので、結局南佐賀の田圃に全弾を投下、農家や鎮守の杜を焼いただけで終わった。」とある。佐賀市の HP では、焼夷弾によって多くの家屋が焼け、命を落とされた方は 61 名と記されている。特に国道 208 号線沿いの諸富、北川副、大崎地区は酷く、「堀という堀には村人たちが首まで水につかって、頭には水草をのせて空襲の終わるのをまっていた」と記されている。

なぜ佐賀市の被害が少なかったのかについては諸説あるが、宮崎さんが話してくれた有明海の干満差がもたらした結果であるかもしれない。

(矢野生子：長崎県立大学経営学部)

環境専門部会 オンライン講演会の案内

演題：世界の低平地シリーズ『インドネシアの低平地：潮汐利用灌漑ネットワークに関する水問題

(Lowland in Indonesia : Water Issues on Tidal Irrigation Network)』

講師：Dr. Maya Amalia ※通訳あり

ランブング・マンクラット大学 (インドネシア)

日時：令和 5 年 3 月 27 日 (月) 14:00~15:30

場所：Zoom のオンラインミーティング

※詳細は低平地研究会ウェブページにて

令和 5 年度 活動報告会の開催案内

運営委員会の決議、ならびに各部会の活動が報告されます。開催方式はハイブリッド方式で、現在 5 月での日程を調整中です。詳細が決まり次第、会員の皆様へお知らせいたします。なお、特別講演会は研究会発足 30 周年の記念事業の一つとして、11 月頃に催されます。

地域創生専門部会

『佐賀の歴史—古代史編』紹介

地域創生専門部会の研究成果本が発刊されました。本書では、背振の山々の中に点在する神社仏閣と有明海の豊かさを象徴する物語や祭りの中に日本の古代史の原点があることが説明されています。会員の皆様には配布できますので、研究会事務局へご連絡ください。

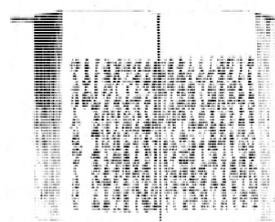


歴史・文化専門部会

2022 年度史料集刊行企画

「諫早泉水海入漁争論—佐賀川副郷の入漁」

佐賀鍋島藩の家老である諫早家の日記のうち、安政期(1855~1860年)に佐賀本藩領川副郷犬井道(現佐賀市川副町(以下、「川副町」))と諫早諸浦との間で起こった漁場争論「東前海一件(ひがしまえうみいっけん)」を翻刻します。漁場は諫早泉水海ともよばれる諫早内海(現諫早湾)です。



「安政 4 年日記の記事。中央付近に

「諫早泉水海」とある。」

諫早は諫早家の私領にあたり、同家は鍋島家の親類同格として藩政の一翼を担っていました。『佐賀県史中巻』第 4 章第 5 節「諫早湾の領海争い」(城島正祥著、佐賀県史編さん委員会編、1968 年刊)では、佐賀領川副郷漁民による諫早泉水海への入漁をめぐる起こった漁場争論である「東前海一件」に至るまでの経緯が述べられています。しかし、その後の佐賀藩における訴えは記録されていません。令和 2・3 年度の古文書講座で扱った諫早家文庫には、その後の安政期における東前海一件が記されており、一連の裁決やそれをうけた漁師の行動などを知ることができます。漁場争論の展開を知る一端として貴重な記録なので、翻刻のうえ上梓する予定です。

低平地研究会 発足 30 周年記念事業

2023 年 11 月に研究会発足から 30 年が経過します。そこで、30 周年を記念した特別講演会、記念誌発行などを企画しています。時期が近づきましたら会員の皆様へご案内いたします。

編集後記

コロナ禍はこのまま落ち着いてほしいですね。これまでの活動を活かして、積極的な対面活動にしたいものです。編集：三島悠一郎、後藤、武富 (lora@lora-saga.jp) 巻頭写真：中尾亮太 (佐賀大学理工学部都市工学部門)